

海洋島

第10巻 第2号 (通巻56号)

東京都小笠原水産センター

2008年7月14日発行

〒100-2101 東京都小笠原村父島字清瀬

☎ 04998-2-2545

Fax. 04998-2-2546

小笠原のサンゴ

小笠原海域には約200種のサンゴが生息しているといわれています。リーフが発達せず、沖縄などで見られるような多様なミドリイシ類を中心とした景観は見られません。しかし、大きな群体や群集が景観の要素となっている場合がしばしば見られ、それらのサンゴが長生き出来る環境があると考えられます。

これまでの調査で、小笠原海域では大規模な攪乱は2003年の白化が1回記録されただけです。食害生物(オニヒトデやサンゴ食貝類)の大発生や、ホワイトシンドローム、異常骨格等の病気の記録もありません。これは小笠原海域は周辺の生態系や産業活動から孤立しており、攪乱要因(食害生物の幼生、病気の原因となるウイルスや細菌、化学物質)の流入は少なく、またリーフが発達せず、外洋に面しているため、海水の交換が比較的早く、高水温が長時間継続しにくい構造となっているためと考えられます。



A. donei の大きな群集

2003年9月、小笠原諸島母島列島のサンゴ礁で大規模な白化現象が発生し、一部のサンゴは死亡しました。その後、水産センターでは被害の大きかった母島御幸浜を中心に毎年追跡調査を行ってきました。

御幸浜の水深10m地点での被度は白化により41.9%から33.5%まで減少しました。しかし、白化から3年後の2006年11月の調査では白化前の被度まで回復し、

2007年10月には白化前の被度を上回りました。

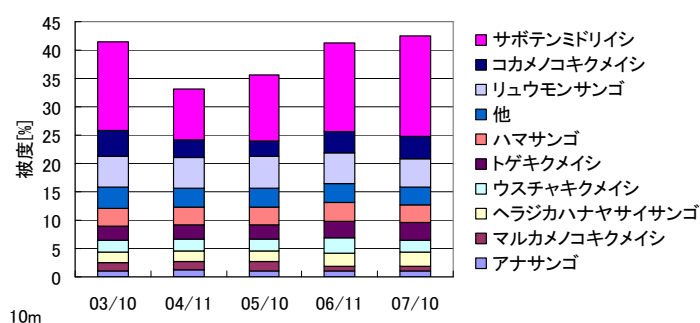


図 御幸浜 10m 地点のサンゴの種類別被度の推移

御幸浜の水深3m地点での被度は白化により40.3%から17.4%まで減少しました。被度は順調に増加し、2007年10月の調査では26.1%(白化前の65%)まで回復しています。

被度の増加には生き残ったサンゴの成長と、白化後の産卵で生まれたプラヌラ幼生が着生し成長したものがああります。水深10m、3mの調査地点ともこの二つの増加が確認できました。特に着生による増加は人の手を借りることなく、産卵により資源を維持回復していく力が小笠原の海にはあることを意味します。

追跡調査と同時に、水槽内での稚サンゴの生産技術の開発も行いました。産卵誘発、天然産出卵から稚サンゴを生産することができるようになりました。しかし、現在の小笠原海域では、サンゴ礁の回復は順調であり、移植などの直接的な人為介入はするべきではなく、サンゴ礁の原生状態を保存し、自然の推移にゆだねる方法が最適であると考えています。

しかし、温暖化をはじめ化学物質の流出等、地球規模での環境の変化に対応できるよう、水産センターではモニタリング、稚サンゴの生産飼育試験を継続していきます。